

サルガ鼻燈台洞窟遺跡西岩陰地点の調査

竹広文明¹・渡辺貞幸²・会下和宏³

A study on the cave sites at Shimane Peninsula —the survey at location rock shelter on the west of Sarugahana Tōdai cave site, Mihonoseki Town, Shimane Prefecture—

Fumiaki Takehiro¹, Sadayuki Watanabe² and Kazuhiro Ege³

Abstract: There are many caves along Shimane Peninsula coast, and they are considered sea caves. Some of them were used by the ancient people for dwellings or other purposes, and remain as the archaeological sites. These cave sites are located facing the coastal line, so it is considered that the ancient people who would use or used the cave sites were influenced by the sea level changes or other environmental changes. And for these reasons, researches of the cave sites contribute to not only archaeological studies but also palaeo-environmental studies and so on. With these aims, we planned the excavation of the cave sites, and carried out the excavation at Sarugahana Tōdai cave site, Mihonoseki Town, Shimane Prefecture, in 1995 and 1996 (Takehiro and Watanabe *et al.*, 1996; Takehiro and Ege *et al.*, 1997).

In 1997, we researched the Location rock shelter, 10 m west of Sarugahana Tōdai cave site. In this location we found some archaeological remains, Jomon potsherd, obsidian flakes and so on, in 1996's research. This location was probably thought to be the archaeological site, and we carried out a preliminary survey at this location. Judging by the present data, the rock shelter at this location is thought to be formed by the ancient marine erosion, and to be used for the dwelling or other purposes. And this rock shelter is thought to have suffered the marine erosion or other influences continuously after the emergence of the initial shape, so there is also the possibility that the initial shape of this rock shelter was the different form, for example, sea cave and so on. To study further the significance of this location, we need to do more future researches.

Key words: cave site, sea cave, Shimane Peninsula, sea level changes, Location rock shelter of Sarugahana Tōdai cave site.

調査の目的

われわれは、島根半島に所在する海蝕洞窟を利用した洞窟遺跡の調査研究を進めており、現在、八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡の発掘調査を中心におこなってきている(竹広・渡辺ほか, 1996; 竹広・会下ほか, 1997)。これは、洞窟遺跡の調査研

究が、考古学にとどまらず、古環境の復元など、諸科学にも貢献できるという観点から、島根半島所在の洞窟遺跡の調査研究を実施してきており、主に次の点を目的として研究を推進している。

(1) 洞窟遺跡の考古学的調査により、島根半島における洞窟遺跡利用の歴史的経過を解明する。

(2) 洞窟遺跡の背景にある海蝕洞窟の形成史、

¹ 島根大学汽水域研究センター
Research Center for Coastal Lagoon Environments, Shimane University, Matsue 690-8504, Japan.

² 島根大学法文学部
Faculty of Law and Literature, Shimane University, Matsue 690-8504, Japan.

³ 島根大学埋蔵文化財調査研究センター
Center for Archaeological Research, Shimane University, Matsue 690-8504, Japan.

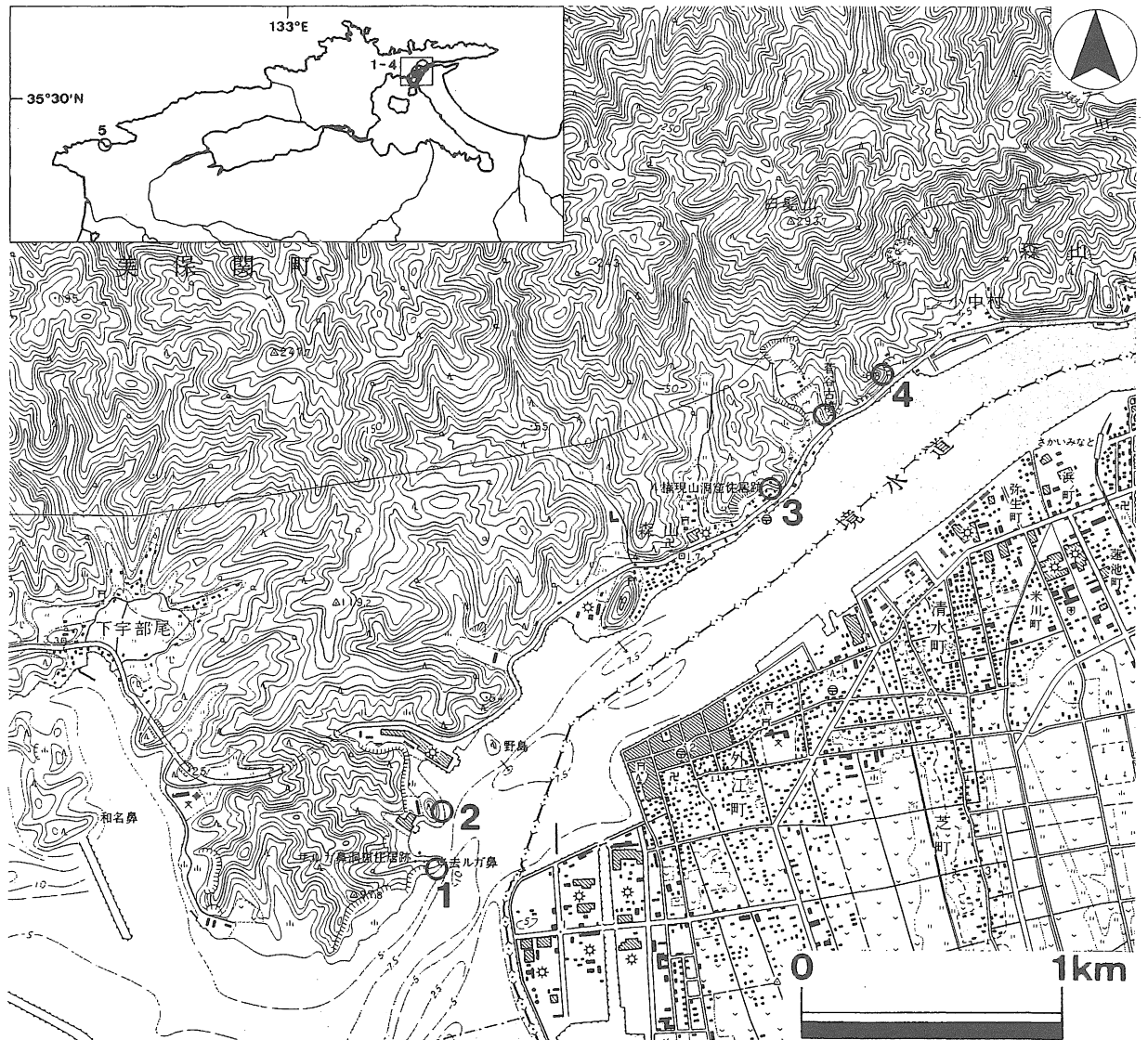


図1 サルガ鼻燈台洞窟遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 地形図「境港」による)

1 サルガ鼻燈台洞窟遺跡 2 崎ヶ鼻(サルガ鼻)洞窟遺跡 3 権現山洞窟遺跡 4 小浜洞窟遺跡 5 猪目洞窟遺跡

Fig. 1 Location map of Sarugahana Tōdai cave site

さらに洞窟を形成するにいたった海面変動など、自然環境変化についての検討資料を得る。

1997年度は、こうした調査の一環としてサルガ鼻燈台洞窟遺跡の西に所在する岩陰状の地点について測量を中心とした調査を実施した。

(主な調査の経過)

- 1995年度 八東郡美保関町森山サルガ鼻燈台洞窟遺跡の試掘調査
- 1996年度 サルガ鼻燈台洞窟遺跡の第1次発掘調査
- 1997年度 サルガ鼻燈台洞窟遺跡西岩陰地点の測量調査

サルガ鼻燈台洞窟遺跡西岩陰地点と調査の経過

サルガ鼻燈台洞窟遺跡西岩陰地点^(註)は、サルガ鼻燈台洞窟遺跡の西約10mの海岸岸壁沿いにあり、地籍はサルガ鼻燈台洞窟遺跡と同じく八東郡美保関町森山1073番地である(図1, 図版-1)。この西岩陰地点は、1996年度のサルガ鼻燈台洞窟遺跡の調査の際に、調査に参加した高橋保夫氏が、同年度8月4日に、この地点の堆積層中に黒曜石製石器を発見し、その後の踏査で縄文土器などの散布も認められ、新たな遺跡である可能性が考えられた。また、西岩陰地点は、小さな入り江状の地形となっており、この地点の岸壁は、かなり崩落の跡が認められるが、現状でも僅かながら岩陰状となっており、岩

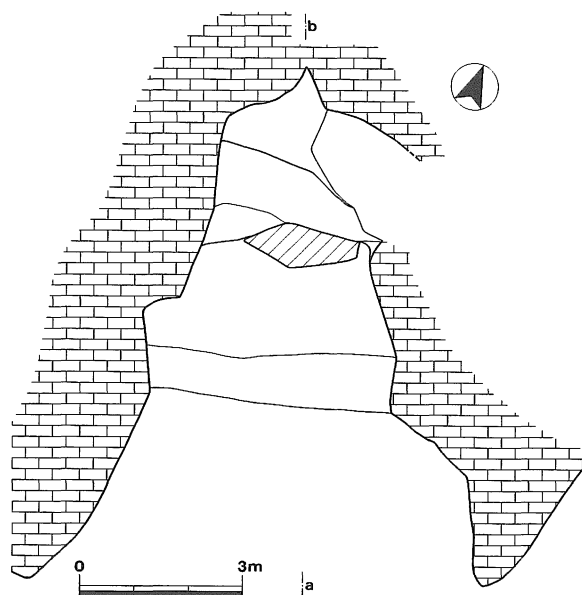


図2 サルガ鼻燈台洞窟遺跡西岩陰地点平面図
Fig. 2 Plan of Location rock shelter of Sarugahana Tōdai cave site

陰遺跡である可能性も考えられた。このため、今後の調査研究の基礎資料を得る目的で、同地点の測量を中心とした調査を1997年度は実施することにした。調査期間、参加者は次のとおりである。

(調査期間)

11月8日(土)

(調査参加者)

竹広文明(島根大学汽水域研究センター)、渡辺貞幸(同法文学部)、会下和宏(同埋蔵文化財調査研究センター)、松本雅夫(同汽水域研究センター)

今回の調査では、平板測量などの調査をおこなった(図版-2)が、また、あわせて今までのサルガ鼻燈台洞窟遺跡の調査の際に実施できていなかった、絶対高の測定についても標高移動を対岸からおこなうことができた。なお、今回の調査の際も、この地点で縄文土器片、黒曜石製石器、安山岩製石器などを採集している。

1997年度調査の結果

1. 西岩陰地点の状況(図2, 3, 図版-2)

西岩陰地点では、幅約4.5m、奥行き約6mの入り江状の地形となっており、汀線から奥の岸壁までは緩やかに土砂、砂礫や崩落礫などが堆積しており、断面部分では、約2.5mの高さまで堆積物が認められる。また、岸壁の形状は、現状では、図3に示すように、断面部分で、約2.75mのところをもっとも窪んでおり、ここから上方にむけて岸壁がせりだ

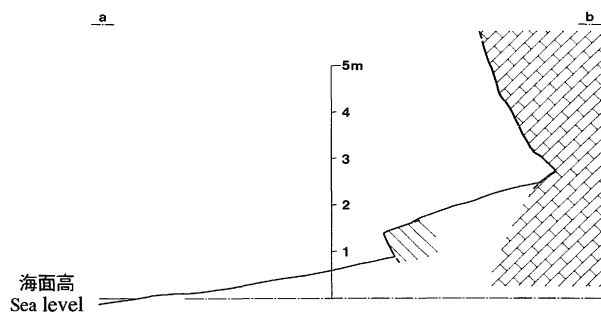


図3 サルガ鼻燈台洞窟遺跡西岩陰地点遺跡断面図
(断面を作製した位置は図2に示す)

Fig. 3 Cross section of Location rock shelter of Sarugahana Tōdai cave site

す、岩陰状の形状を呈している。ただし、岸壁には、岩盤が崩落した跡が認められ、かなり原状からは変化しているようであり、もともと洞窟に近い形状であった可能性も、あるいはあるかも知れない。この地点の堆積層の状況は、かなり波浪や風雨により侵蝕を受けているようであり、元来は今少し堆積層が広がっていたと考えられる。現状からみると、この地点に残る堆積層は、岸壁に向けて緩やかに傾斜して存在しており、また、中央の大型崩落礫を境に傾斜が変わっているが、これは、この崩落礫から海側が波浪による侵蝕を受けやすいためであろう。なお、岸壁の東側は、部分的に砂礫の斜面となっており、岩肌がこれにより覆われているようである。また堆積の状況については、表面的な観察では、岸壁の母岩の流紋岩の小礫をふくむ砂礫で構成されているようであり、東側の砂礫斜面を削りこんだ崖面の状況では、これらの砂礫は斜位に堆積しており、この部分については崖錐状の堆積となっているのかも知れない。

2. 採集遺物(図版-3)

遺物の採集状況については、一部の遺物はこうした砂礫層に挟在しており、これらの堆積層が遺物包含層である可能性が指摘できる。ただし、もちろん発掘がおよんでいないため、プライマリーな包含状況でどうであるかは、調査により確かめていく必要がある。このほかには、遺物は汀付近を中心にこの地点の全体で表面採集できた。

採集した遺物は、縄文土器片、黒曜石製石器、剥片類および安山岩製剥片類などである。縄文土器については、小片や摩耗を受けている資料しか得られておらず、細かな時期は不明である。なお、石器資料のうち図版-3の下段右2点が、堆積層中に挟在していた資料である。

調査の成果と課題

西岩陰地点は、1996年度のサルガ鼻燈台洞窟遺跡の調査の際に、遺物が採集され、遺跡の可能性が高いため、今回、測量を中心とした調査をおこなった。今回の調査でも、この地点で遺物が採集され、遺物を包含する堆積層が残っている可能性が高いと考えられた。西岩陰地点では、このように遺物の散布が認められ、また遺物を挟在する堆積層も認められることから、現状では、岩陰遺跡である可能性があるともみている。なお、調査の所見からすると、現状で岩陰となっている岩盤には、崩落の跡が認められ、元来の形状はかなり失われており、当初は洞窟状の形態であった可能性も考慮に入れておく必要がある。このあたりについては、発掘調査の実施により、ある程度視野が開けるのではないかとみている。いずれにせよ、本地点が、こうした岩陰遺跡であるかどうかを判断するには、この地点に認められる遺物を含む堆積物がプライマリーなものであるのかも含め、今後の調査により確かめる必要があるとの見解である。

また、今回の西岩陰地点の調査で、サルガ鼻燈台洞窟遺跡の絶対高も明かとなったので、これらをふまえて、島根半島の洞窟遺跡群の立地について、今後検討を進めていきたい。

謝辞

本調査を実施するにあたっては、下記の方々にお世話いただいた、記してお礼申し上げます。

田中義昭、錦織慶樹、永田和久、永田公夫、高橋保夫、牟礼時晴、勝部 昭、内田律雄、柳浦俊一、築谷佳一、森山共栄会、松景精麦株式会社山陰工場(順不同、敬称略)

本調査は、文部省科学研究費補助金基盤研究(A)『山陰汽水域の自然史と文化史』(研究代表者:徳岡隆夫)の一部を使用して実施した。

註)

本稿で岩陰と呼ぶものは、豊島 1967 文献でいう波蝕窪に対応してくると考えられる。

ただし、本稿中でも述べているように、本地点の岩陰は崩落あるいは侵蝕により、原状からは形態が変化している可能性もあり、岩陰とした記載はあくまで現状でのものである。ちなみに、豊島 1967 文献によれば、海蝕洞窟、波蝕窪を以下のように使用している。

海蝕洞くつ (sea cave)

……海蝕崖基部にできるくぼみで、幅より奥行きの大のもの

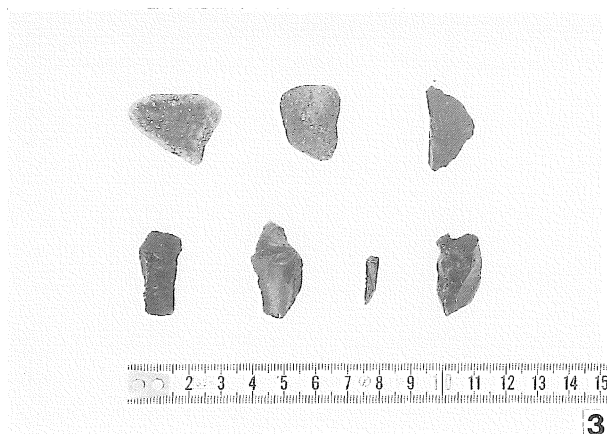
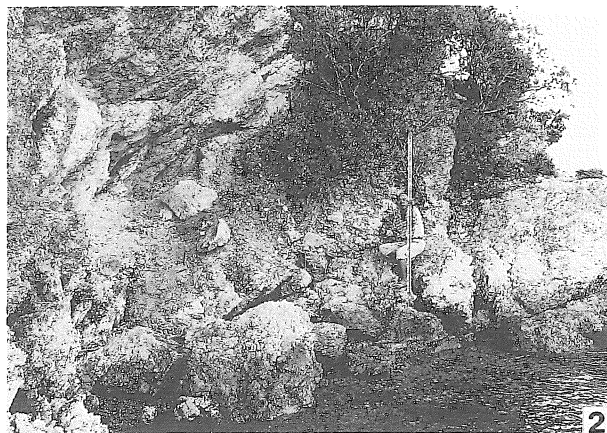
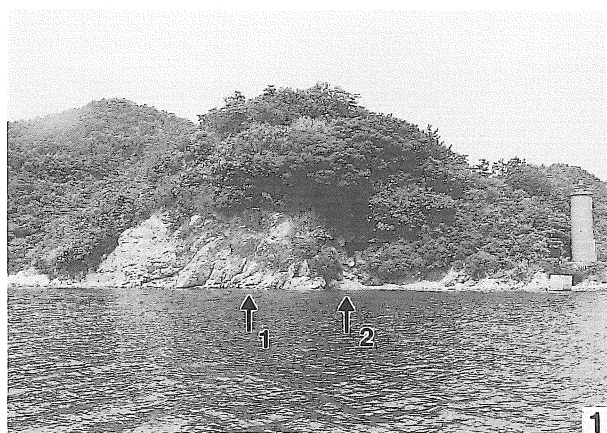
波蝕窪 (notch)

……海蝕崖基部にできるくぼみで奥行きより幅の大のもの

引用・参考文献

- 鹿野和彦・山内靖喜・高安克己ほか(1994) 松江地域の地質・地域地質研究報告 5 万分の 1 地質図幅岡山(12)第 17 号. 通商産業省工業技術院地質調査所, つくば, 126p.
- 松本岩雄(1986a) 原始・古代の美保関. 美保関町誌上巻. 美保関町誌編さん委員会編 pp. 113-194. 美保関町, 美保関.
- 松本岩雄(1986b) 美保関町の考古資料. 美保関町誌下巻. 美保関町誌編さん委員会編 pp. 351-578. 美保関町, 美保関.
- 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編(1967) 日本の洞穴遺跡. 平凡社, 東京, 499p.
- 佐々木謙・浜田正春(1986) 考古. 境港市史上巻. pp. 239-315. 境港市, 境港.
- 佐々木謙・小林行雄(1937) 出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡—中海沿岸縄文式文化の研究 1—. 考古学, 8-10: 458-475.
- 竹広文明・会下和宏・渡辺貞幸・内田律雄(1997) サルガ鼻燈台洞窟遺跡の第 1 次発掘調査. LAGUNA (汽水域研究), 4: 49-57.
- 竹広文明・渡辺貞幸・会下和宏・内田律雄(1996) 島根半島洞窟遺跡の研究—島根県八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡の試掘調査—. LAGUNA (汽水域研究), 3: 117-126.
- 豊島吉則(1967) 山陰海岸における海蝕地形に関する研究. 鳥取大学教育学部研究報告 自然科学, 18-1, 2: 64-98.
- 豊島吉則(1978) 山陰海岸における完新世海面変化, 地理学評論, 51-2: 147-157.
- 山本 清(1967b) 美保関町サルガ鼻・権現山洞窟住居跡について. 島根県文化財調査報告書第 3 集. pp. 69-82. 島根県教育委員会, 松江.
- 山本 清(1995) 古代出雲の考古学—遺跡と歩んだ 70 年—. ハーベスト出版, 松江, 353p.

図版 Plate



1 サルガ鼻燈台洞窟遺跡西岩陰地点全景 (1.西岩陰地点, 2.サルガ鼻燈台洞窟遺跡)

View of Location rock shelter (1) and Sarugahana Tōdai cave site (2)

2 西岩陰地点近景

Close view of this location.

3 採集土器石器

Potsherd, stone tools and flakes collected at this location